

現代俳句森々

矢削 みき子

芍薬の開き初めはくしやくしやと

「俳壇」十月号 山田真砂年（稲主幸）

かなり昔から畑の端に母の好きな芍薬の株があり、毎年決まったように沢山の蕾が立つ。長年見つけたいながら満足な句は詠めなかった。因って掲句の視点の確かさに思わず拍手。「くしやくしや」とはなんとも実感のある表記であり納得させられる。開き初めの限られた時間こそ、瞬時を詠む俳句にふさわしいのだと気付かされる。

「立てば考薬」の花の姿は誰の目にも美しい。素っ気無いようで実はとても温かい心に残る句。